

遠山参良と第五高等学校、花陵会

藤本 誠

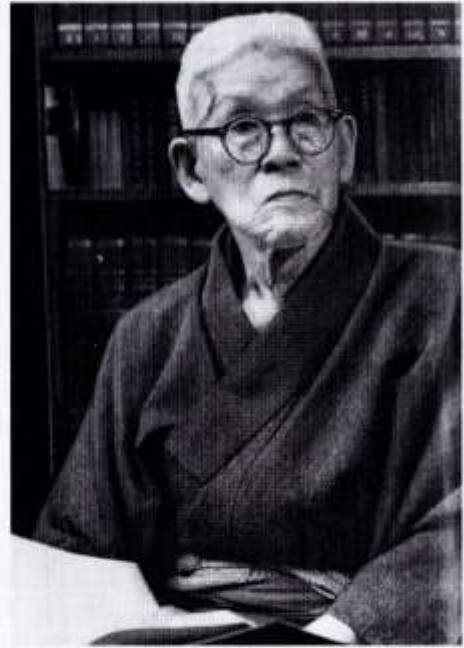
一 遠山参良、長崎鎮西学館から第五高等学校へ

福田令寿氏が熊本英学校の生徒だった明治二四、五年頃、熊本のキリスト教各教派が集まって行っていた連合説教会について、福田氏は次のように回想している。¹⁾

「…各教派が集まって、連合説教会というのを、よくやっておりましたもんな。やっぱりまだ教会の勢力が小さかったから、一つの教会で集会をやっても、聴衆が多く集まらなかった。そこで合同して聴衆を多く集め、なるべく広く一般社会に訴えようという考えですね。／当時、新町に忘吾会所というのがありました。福岡知事発案の当時の社交クラブで、後にはその家は裁縫学校に使われたりしました。合同の説教会

はしばしばその忘吾会所でやったんです。後には各教会がまわり番に会場になりましたが。／後年の五高教授、九学の創立者である遠山参良先生が、まだ長崎遊学中の学生時代でしたが、郷里が鏡で、時々帰省された機会をとらえて、連合説教会にお話を願ったりしました。当時から、遠山さんはなかなかの雄弁家で理路整然たる説教をする人でしたね。／あの鏡という所は、だいぶキリスト教の広まったところで、英学校の初代の校主（設立者）だった浜田康喜さんも鏡でしたもんな。私の同級生でも、鏡から来ているものがだいぶあったように思います」。

遠山は九州学院の創設者ではなく初代院長であり、またこの頃は既に加伯利英和学校英語普通科（本



遠山参良の畏友・福田令寿氏 (95歳)
「百年史の証言」—福田令寿氏と語る—より：注(1)

科)を卒業し鎮西学館の教師をしていた時代であったが、郷里(鏡)に帰省した折には、熊本の連合説教会と呼ばれて信仰的な篤い説教をしていたようである。遠山は当時属していた長崎の出島美以教会(出島メソジスト教会)でも、説教や通訳で雄弁を揮っていた。当時同僚であった同窓の値賀虎之助(神学科第一回卒)らと村落伝道に赴くなどの活動も行った。

また明治二四、五年頃長崎では、出島美以教会に集っていた鎮西学館や活水高等女学校の教職員・生徒たちに大リバイバル(信仰復興)が起こり、一樣に信仰に燃え立っていた。明治二四年は一月の内村鑑三不敬事件のためにキリスト教界が沸騰し、翌二五年一月は熊本英学校で奥村禎次郎事件が発生

し紛糾していた頃である。遠山は一八九二(明治二五)年四月鎮西学館を辞し、アメリカ・オハイオ・ウエスレヤン大学へ留学するため渡米するが、渡米前にD・S・スペンサー(第四代院長)著の『教会史講演第一巻』を翻訳、出版している。遠山にとつては、直向きに信仰的省察を深め、信仰の確立を索めた青春期だったのではないか。その信仰的内省は、明治二四年九月一五日から始められた『處世日誌』に如実に認められている。

ウエスレヤン大学で理学修士(Master of Science)の学位を受領して帰国後、鎮西学館と活水高等女学校で教えていた遠山参良は、当時の第五高等学校英語科主任教授・夏目金之助(漱石)の周旋で、一八九九(明治三二)年八月七日英語科講師として赴任する。翌明治三三年一月二二日には五高教授を拝命し、高等官六等に叙せられている。

二 漱石の後を受け英語科主任教授就任

明治三三年七月上旬には、夏目教授の依頼により後任の英語科主任を引き受けることになる。その時の顛末を、川瀬清(九州学院第三代院長)が『熊本県近代文化功労者』(昭和五六年二月二〇日発行、熊本県教育委員会)で次のように記している。

「就任して一年経った頃の先生に、このような逸話がある。漱石先生は、遠山先生が熊本に來られた翌年には外国留学のため熊本を引揚げられたが、その時漱石先生の後をひきうけて主任になる者がいかなかった。漱石先生は遠山先生の語学と才能をみこんで、しきりに勧めるが、先生はごめんといつて逃げられる。一度や二度断られて引き下がる漱石先生ではない。

或る時、「ちよつと遠山君」と傍に呼んで声を低くして、「遠山君、英語の主任になるような奴は、よほどバカな男にきまつているよ」と囁いた。すると遠山先生は、につこりして「よし僕が引きうけた」と言つてうるさい英語科主任の役目を承諾されたということである。両先生の人格が、この辺にも窺えるような気がして面白いと思う。」(二九六頁)

遠山院長から直接薫陶を受けた山崎貞士(九州学院第七回卒業生)は、この経緯について次のように記している。

「遠山先生が漱石の後に、五高の英語の主任になった経緯を伝え聞いたところでは、漱石が内々イギリス留学が決定したので、英語科主任を遠

山氏に譲ろうと思ったものの、遠山という人物は簡単に口説き落とせる器ではない。そこで「遠山さん、英語の主任になるような人物は余ッ程の馬鹿か阿呆者だらうね」と漱石がいった途端、「ではわしがやったらるか」と遠山先生が引き受けたというのである。

漱石は遠山先生の性格を見抜いて、その俠気とか、熊本流でいえば一種のモッコス性をたくみに利用したのかもしれない。一面遠山先生のさっぱりした虚心坦懐ぶりも察知できようか。」(『幾山河』平成七年一月二日発行、熊本日日新聞社「漱石に傾倒させた二人の先生」五六〜五八頁)



漱石英国留学前の送別記念写真：1900
(明治33)年7月頃
前列右：夏目金之助、左：奥太一郎、後
列右：五高某氏、左：遠山参良

「機知の漱石」に対し、「名利をのぞまず、他者のために己を没する遠山氏」と、池永春生第四代院長は「遠山参良先生」(「キリストの証人」一九六九年・昭和四五年一月一五日所収)で評している。

後任を遠山参良に託した漱石は、英国留学のため家族とともに同年七月一八日か一九日に、「鏡、筆と共に、洪水直後で汽車不通の箇所を徒歩で、熊本市を去り東京市に」向った。明治三三年七月四日から一六日にかけて降った豪雨により熊本は大洪水に襲われ、汽車は各地で不通になり、白川の橋梁は悉く流失し、兩岸の交通は途絶したのであった。

三 五高教授遠山参良と花陵会

漱石の後を受けて英語科主任教授となった遠山は人望を集め、花陵会でも中心的な指導者となっていく。教授に就任した翌月の二月一日には、早速熊本メソジスト三年坂教会で催された花陵会主催演説会で、一般対象に講演をしている。

明治三三年は、英国聖公会宣教師ブランドラムが花陵会館(自炊寮)建設のため奔走し、一二月二二日には登記を済ませて土地購入を完了させた。ブランドラムが自分の子供のために蓄えておいた教育資金をあてがって、土地購入資金四〇〇ポンド

(三九〇〇円)を工面し、借入金の子子二〇〇円も負担していたのである。しかし、ブランドラムは会館の完成を見ることなく、同年一二月三〇日、日本脳炎の療養のため香港の病院へ行く途上の上海で客死したのであった。この花陵会創立の功労者ブランドラムの追悼会が、翌三四年一月六日、各会連合によ



「熊本・五高花陵会」(明治33年頃か)
後列右1番目:五高某氏、3番目:遠山参良(花岡山鐘懸松(かねかけまつ)下にて)(東北大学総合知デジタルアーカイブより)

り遠山が会員となっていた熊本メソジスト三年坂教会で行われた。

一九〇一(明治三四)年には、花陵会が創立された一八九六(明治二九)年の一月に一度目の来熊をしていたJ・R・モットが二度目の来熊をする。奈良常五郎「日本YMCA史」によると、二〇

世紀に突入し世界各国で盛んに伝道戦線が繰り広げられたが、日本でも明治二〇年代から三〇年代の始めにかけて反動期に極度に衰微した教勢を回復するため、伝道の強力な推進がなされた。「1900（明治三三）年4月下旬、大阪で第10回の『福音同盟大会』が開催され、20世紀の第1年目を期して全国的に『大挙伝道』を行うことが決議され、会長に本多庸一、副会長に小崎弘道があげられ、伊藤一隆、波多野伝四郎、島貫兵太夫、丹羽清次郎などが委員に選ばれた。何れもYMCA関係の人々であった」⁽⁹⁾。翌明治三四年には伝道の氣勢が次第に上がっていった。

日本キリスト教界は著しい衰微から立ち直りつつあったが、日本YMCA全国協議会に出席し、特に学生に伝道する目的で、同年一〇月モットは二度目の来日をしたのであった。熊本には一〇月一九日に来訪し、花陵会主催の大伝道演説会が当日三年坂教会に六〇〇人以上の参加者を集めて、一九時から二二時にかけて行われた。花陵会主催のモットの演説会は翌二〇日にも、一四時から末広座で一般の参加者を対象に、一九時から五高瑞邦館で五高生を対象に行われた。この会の後、キリスト教へ入信を希望する者が後を絶たなかったという。このモットの演説の通訳は遠山参良が務めたのではないかと推察される。長崎の出島美以教会でも留学前から通訳

や説教を行っており、留学後の遠山の英語力の卓越さは、まだ留学経験のない夏目漱石を始め衆目の一致するところであった。

花陵会主催のモット伝道大演説会は一〇月二四日も行われた。熊本草葉町教会を会場に決心者を対象にして、一八時からペインターが、続いて遠山参良が演説をした。またモットに随行した笹森宇一郎（当時、日本学生基督教青年会同盟中央委員）も演説をしている。

明治三五年一一月一日には、一九時から三年坂教会で花陵会創立第六回記念演説会が開かれた。ブランドラム亡き後、その遺志を引き継いで花陵会を支えてきた遠山参良も参加者を前に演説をし、花陵会創立六周年を祝した。

（ふじもと まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長）

〔注〕

〔1〕熊本日日新聞社編『百年史の証言 福田令寿氏と語る』（一九七一年六月二五日発行、日本YMCA同盟出版部）の二二七、二二八頁。

〔2〕出島美以教会（出島メソジスト教会）は、私立加伯利英和学校（後の鎮西学院）の創設者の一人デビソン宣教師によって一八七六（明治九）年一月、長崎出島二三番

に建設された。

(3) 『活水学院百年史』(昭和五五年三月三十一日発行、活水学院)には、その時のリバイバルについて次のように記されている。

「これにつづいて一八九二(明治二五)年には、さらに広く、深く信仰復興が起こった。この年の一月岡部健太郎氏が米国留学から帰り、本校教師に就任すると靈的感化が生徒間に浸透していった。まだ幼い生徒たちも靈感に触れて全く別人のようになった。街頭に進出して道行く人を引きとめて、「汝等聖靈を受けよ」と叫ぶまでに至った。」(五一頁)

(4) D・S・スペンセル著、H・B・ジョンソン(第六代院長)序、遠山參郎(參良)・山鹿旗之進訳、東京美以出版舎(田中柑三郎)、明治二五年。英文扉の訳者名は「SABURO TOYAMA」のみが掲出されている。

(5) 『九州学院百年史—九州学院とその時代—』(二〇二二年一月一日発行、学校法人九州学院)の第一篇、第二章、第二節、「八 内村鑑三『求安録』と遠山參良」参照。

(6) 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』(昭和五九年六月二〇日発行、集英社)の二二二頁。

(7) 同右書の二二二頁。

(8) 『五高・熊大キリスト者の青春—花陵会一〇〇年史—』

(一九九六年二月一日発行、熊本大学YMCA花陵会)の二六頁。

(9) 『熊本白川教会百年史』(一九八五年二月二二日発行、日本基督教団熊本白川教会)の二四頁。

(10) 奈良常五郎『日本YMCA史』(昭和三四年一月三〇日発行、日本YMCA同盟)の一一五頁。

(11) 明治一八年に熊本市祇園橋付近に建てられた劇場で、明治三五、六年頃旭座に名称を変更した。

(12) 一〇月二〇日一九時から五高瑞邦館で行われたモットの演説の内容は、『龍南會雜誌』第八八号(一九〇一『明治三四』)年一月二四日刊)・『雜報』七三、七九頁に「モット氏の講演」として掲載されている。同「悶々録」八十六頁には、

「△モット博士、公々然演壇上學生のインピュリチーを慨す、熱罵冷嘲、最皮肉を極む、而かも今日の學生、到底謹聽せざる可らず。△博士は亦これ一個の精神家識るべし一時間の演説よく人を動すを、彼の語は飛ばずして残る。」

と記されている。

(13) (8)の一七頁、及び一八六頁。